

8305 第一次大戦当時のアメリカの大統領, . . .

第一次大戦当時のアメリカの大統領, ウッドロー・ウイルソンは大雄弁家の名をほしいままにした人ですが, こういうことを言っています.

一時間ぐらいの長さの演説なら, 即座に登壇して, やってのけられる. 二十分ほどのものだったら, 二時間ほどの用意がある. もし, 五分間演説だったら, 一日一晩の支度が無いとできない.

こういうことを知っている人間がわれわれのまわりに少ないというのが, 耳の言葉の美学をおろそかにしてきた結果です.

外山滋比古『耳の言葉の美学』

[許容訳例]

The president of the U.S.A. at the time of World War I, Woodrow Wilson, who enjoyed a reputation of an eloquent speaker, once said this:

“If I am asked to make an hour’s speech, I can get up on a platform at once and manage it successfully. With one of twenty minutes, I need two hours to prepare for it. For a five minute one, I cannot do without a whole day and night’s preparation.”

That few around us are aware of such things is a result of the fact that we have neglected the aesthetics of ear language.

[翻訳例]

Woodrow Wilson, President of the U.S.A. at the time of World War I, who enjoyed a reputation as a great speaker, once said something to the following effect:

“With a speech lasting about an hour, I can get up on a platform and bring it off on the spot. With one of twenty minutes or so, I need about two hours’ preparation. For a speech lasting only five minutes, I can’t manage without a whole day.”

That there are so few people about who are aware of this truth is a result of our neglecting the aesthetics of “ear language.”

■第一次大戦当時のアメリカの大統領, ウッドロー・ウイルソンは大雄弁家の名をほしいままにした人ですが, こういうことを言っています. (8305)

★「第一次大戦当時のアメリカの大統領, ウッドロー・ウイルソン」という書き方は, 日本語としてはごく普通で「肩書き+人名」です. この書き方は, 「人名」を中心にしたものですから「人名」を主語にすることになります. その場合, 英語では Woodrow Wilson, President of the U.S.A. at the time of World War I となります. 日本語と同じ順序で The president of the U.S.A. at the time of World War I, Woodrow Wilson とすると The president of the U.S.A.が主語で Woodrow Wilson は同格的に付け加えた感じになります. なお,

Woodrow Wilson, the president of the U.S.A.…という言い方もできますが、この場合は、(who was) the president of the U.S.A.…という感じになると思います。この形は実際にはあまり使わないと思いますが、何か他のものと区別して述べたいような場合には使います。

★「大雄弁家の名をほしいままにする」は enjoy a reputation of an eloquent [a great] speaker とか enjoy a reputation as a great [an eloquent] speaker などです。英語としては a reputation as…の方が普通でしょう。他にも be widely renowned as…なども使えます。なお、great と eloquent を重ねて使うというようなことはしないと思います。

●「連体修飾節＋不定代名詞的体言」(大雄弁家の名をほしいままにした人)

「大雄弁家の名をほしいままにした人」は「連体修飾節(大雄弁家の名をほしいままにした)＋不定代名詞的体言(人)」ですから、英語では「(代)名詞(a person)＋関係詞節(who….)」ですが、先行詞が特定名詞(Woodrow Wilson)なので「コンマ＋who…」としなければなりません。なお、一般に「…する[した]人ですが…」は関係代名詞を使っていい典型的な場合です。

●「話題導入・前置きの[が]」

「…した人ですが…」の[が]は「逆接」ではなく「話題導入・前置きの[が]」です。これは and か、修辭的工夫で which; where [in which] にするとか、文を切るとかで対応します。たとえば、

彼は駅前のアパートに住んでいますが、そのアパートにはほかに八世帯が住んでいます。

He lives in an apartment house by the station, which is inhabited by eight other families.

He lives in an apartment house by the station, where [in which] eight other families have their homes.

He lives in an apartment house by the station, and there are eight other families there [in it].

「机の上に本がありますが、その中に英和辞典があったら持ってきてください。」

“There are (some) books on the desk. Please bring me an English-Japanese dictionary, if you find [if there is] one among them.”

我々は昨日田舎の道をジョギングしたんだが、道はたいへんぬかるんでいた。

We jogged on a country road yesterday. The road was very muddy.

のように。

★「こういうこと」は、必ずしもウイルソンの言葉通りのものとは限りませんので、this ではちょっと不十分な感じがします。as follows も言った通りの言葉ということになりますから使えません。something to the following effect とすれば、そのまましゃべった通りの言葉かどうかわからないが、とにかく結果として次のような意味になった、という内容にな

り、このような場合に使います。

◆「日本語の現在完了」に関して

★「こういうことを言っています」は、ある意味では英語の現在完了に似ていると思われます。言い換えると、「ウッドロー・ウイルソンはこういうことを言ったことがある」ということですが、英語の場合、ウイルソンはすでに亡くなっているのです。現在完了は使えません。そうかと言って、普通の過去の表現で said とすると、どうしてもいつ言ったのかという時期を示す言葉がほしくなります。この場合 once を加えて、once said…として、コロン(:)を打って直接話法の文を付ければよいと思います。

■一時間ぐらいの長さの演説なら、即座に登壇して、やってのけられる。(8305)

●「隠れ連体修飾節」(一時間ぐらいの長さの演説)

「・・・の＋名詞」の「の」は曲者です。表現の短縮というのはどの言語にもありますが、日本語の「の」は動詞を内包することが出来ます。つまり、動詞を端折る時によく使われるのです。たとえば、

「これが僕たちの(＝が住んでいる)うち。小さいけど庭がついていて、日あたりもいいんだ。」

“This is our house, which is small but has a garden and gets the sun.”

“This is (the house) where we live. It's small, but it has a garden and it gets the sun.”

「君があのととき助けてくれなかったら、いまの(＝存在している)僕はないだろうね。」

“If you had not helped me at that time, I would not be what I am.”

第一次大戦が終わって間もないころ、某伯爵の(＝が催した)晩餐会で、ある老婦人が急死した。

Shortly after the end of the first World War, an elderly lady died suddenly at a banquet (which was) given by a certain Count.

のように。

ここの「一時間ぐらいの長さの演説」は「一時間ぐらい長く続く演説」を短縮したものです。したがって、英語では「名詞(a speech)＋関係詞節(which lasts about an hour)」で表すことになります。ところで、今度は英語の短縮表現ですが、一般に「関係詞＋be 動詞＋分詞」の場合、「関係詞＋be 動詞」は省くことができますが、「いつものこと」を表す現在時制の場合は「関係詞＋動詞」を「現在分詞」に変えて短縮することができます。たとえば、

A philosopher is not a thinking man but a man thinking.

哲学者とは(今)考えている人ではなく (いつも) 考える人のことである。

{He lives with his wife in a little house facing the lake.

彼は奥さんと小さな家に住んでいてその家は湖水に面しています。

のように。

したがって、この which lasts は lasting と短縮することができますから、「一時間ぐらい長く続く演説」という日本語に一番近い表現は a speech lasting about an hour になると思います。なお、他に、a speech of about an hour でもいいし、about を使わないで後ろに or so を付けてもいいでしょう。

● [なら] (付帯条件)

「一時間ぐらいの長さの演説なら」は主語が決めにくい文です。If I am asked to make an hour's speech, …とする方法もありますが、「・・・の場合」というような意味のある with を使って With a speech lasting about an hour, …とする方法があります。with はとても使い方の広い言葉で、ランダムハウス英語辞典では「付帯条件を表す」と分類して、With cleanliness, any barn would do. (きれいなら、どんな納屋でも構いません) /With your leave, I'll shut this window. (よろしければ、この窓を閉めます) の例を挙げています。なお、ここは、他には For a speech lasting about an hour, …も使うことができます。

★「即座に」は「登壇して」に懸かるのではなく、次の「やってのけらせる」を含めて全体に懸かっています。したがって at once ではなく on the spot を文末に置くのが日本語に一番近いのではないかと思います。

★「登壇する」は ascend [mount] a [the speaker's] platform ですが、次の「やってのける」と考え合わせると「登る」という動作ではなく「演壇に立って(get up)演説する(be on the platform)」という意味に比重がかかっていると思われます。したがって get up on the platform がいいと思います。なお、「立って」に stand は避けた方がいいと思われます。stand には「立つ」の他に「立ち上がる」(e.g. When he came into the room, everybody stood.)とか「立っている」(e.g. He stood in the doorway.)という意味もあり、意味が曖昧になります。

★「やってのける」は carry it off とか bring it off という表現が使えます。(can) manage it successfully でも間違いではありませんが、manage の中に successfully が含まれているので、くどいです。

● [て] (動作順次)

「登壇し [て] やってのける」の [て] は「動作順次」ですから and で対応することになります。

★「・・・られる」は、ここでは「・・・することができる」ですから can です。

■二十分ほどのものだったら、二時間ほどの用意がいる。(8305)

★「二十分ほどのもの」は、そのまま訳すと an about twenty minutes one となりますが、a(n)と one が離れすぎているので one of about twenty minutes とすることになりますが、

ここもすぐ前と同じように one lasting about twenty minutes とか one lasting twenty minutes or so とすることも出来ます。

● [(・・・だっ) たら]

ここは If it's...が使えますが、ここも with を使って With one of...でもいいと思います。

★「二時間ほどの用意がいる」は prepare を使って I must prepare for it for about two hours [two hours or so]と書くことが出来ますが、for が重なってしまうので I need about two hours [two hours or so] to prepare for it とか I need about two hours' preparation のようにすればいいと思います。

■もし、五分間演説だったら、一日一晩の支度がないとできない。(8305)

★「五分間演説」も「演説」は上の流れを受けて one ですが、「五分間」は five minutes ではなく、compound adjective として five(-)minute を使って a five(-)minute one です。

● [もし・・・なら] (If...; With...; For...)

「もし、五分間演説だったら」は If it's a five-minute one でも With a five-minute one でもいいのですが、繰り返しを避けて For a five-minute one としてもいいでしょう。

★「一日一晩」は「丸一日」、つまり 24 時間という意味でしょうから for one day and night ではなく a whole day and night とした方がいいと思います。もっとも、a whole day でも「丸一日」になります。

★「一日一晩の支度がないとできない」は I cannot make it without a whole day and night's preparation でも間違いではありませんが、I cannot do without a whole day and night とすれば一番簡単だと思います。この場合の do は「やっていける・やってのける」という意味の、manage に相当する特殊なニュアンスの do です。したがって、do の代わりに manage を使ってもよいし、without a whole day and night の代わりに without a whole day でもかまいません。もちろん、「支度」(preparation)を加えて without a whole day and night's preparation も可能です。

■こういうことを知っている人間がわれわれのまわりに少ないというのが、耳の言葉の美学をおろそかにしてきた結果です。(8305)

● 日本文は「連体修飾節+体言」({準単位情報})の塊

日本文は「連体修飾節+体言」({準単位情報})の塊だなとも思います。この文章は {単位情報} 的には「(こういうことを知っている人間) {準単位情報} が (われわれのまわりに少ないというの) {準単位情報} が、(耳の言葉の美学をおろそかにしてきた結果) {準単位情報} です」と出来ています。したがって、英語では、関係詞節やそれを深層にした簡略形を組み合わせることになります。

◆ such a thing と such things

「こういうこと」は、ここではウイルソンの言ったことを受けているのですから such a thing は使えません。such things なら使えます。such a thing というのは a thing of that nature [kind] という感じですが、such things というとき多くの場合 things of the kind that I have just

mentioned [described]ということになるからです。なお、ここでは this truth とする方法もあります。

★「知っている」は know ではなく「ちゃんとわかっている」という意味で have realized あるいは、そういう意味で用いられる are aware of を使った方がいいでしょう。

●「連体修飾節＋不定代名詞的体言」（こういうことを知っている人間）

「こういうことを知っている人間」は「連体修飾節（こういうことを知っている）＋不定代名詞的体言（人間）」ですから、英語では「名詞(people)＋関係詞節(who are aware of this truth)」と処理します。ただし、文章技巧によっては、下で述べるような方法も可能です。

★「耳の言葉の美学」は the aesthetics of ear language ですが「耳の言葉」は作者の造語と考えると“ear language”と引用符で囲ってもいいでしょう。なを、ear language は sign language というような一つの uncountable なものとして扱いますから冠詞は不要です。

★「おろそかにしてきた」は過去から今現在まで引きずってきたことですから have neglected と現在完了にします。

★「・・・の結果」は、一つだけではないでしょうから the result of…としないで a result of…と不定冠詞を使った方がいいでしょう。

●「連体修飾節＋同格不定代名詞的体言」（耳の言葉の美学をおろそかにしてきた結果）

「耳の言葉の美学をおろそかにしてきた結果」は、正確には「耳の言葉の美学をおろそかにしてきたという（事実の）結果」ですから、英語では「名詞(the fact)＋同格節(that we have neglected…)」で処理しますが、同格節(that we have neglected…)は of our neglecting…と句に変えることもできます。

●文章の技巧

「こういうことを知っている人間がわれわれのまわりに少ないというのが、耳の言葉の美学をおろそかにしてきた結果です。」という文章の前半の「こういうことを知っている人間がわれわれのまわりに少ない」は、上で述べられた言説から読者はすでにある程度気がついているだろうというような前提でまとめられている既知性の強い情報です。このような場合には That…とか A fact that…とするのが一番いいと思います。つまり、That there are so few people about who are aware of this truth is a result…/ That few around us are aware of such things is a result…とすれば既知性が出ると思われます。なお、たとえば、Few around us are aware of such things, which is a result…のような構造でも書くことができますが、こうすると、which の前後の比重が同じぐらいになってしまいます。